

# 巻頭言



淡水会 会長 岡村 武和

(学部27回)

令和6年、兵庫県立大学は創立20周年になります。

平成16年4月、歴史と伝統を持つ神戸商科大学・姫路工業大学・兵庫県立看護大学が統合して開学いたしました。

昭和4年県立神戸高等商業学校、昭和19年県立神戸経済専門学校、昭和19年県立高等工業学校、昭和19年県立工業専門学校から、戦後新生大学スタートからは昭和23年神戸商科大学、昭和24年姫路工業大学、平成5年兵庫県立看護大学が誕生し大きく発展。現在の兵庫県立大学の礎を築いてまいりました。20年の歴史を積み重ねてきた、いま、もう一度原点に立つて、これからの将来像を考える時ではないでしょうか。

淡水会会長として、卒業生の皆様が学友会の認識をもっと持っていただきたいと願います。卒業したけれど、自分の学部はわかるけれど、それ以外の学部はわからない。卒業するにしても、文系・理系・看護系にかかわらず諸先輩の活躍している会社を選択のみに置いておくことは人生の中でも重要ではないでしょうか。3大学の統合がもたらすものは、計り知れないものが存在しています。学生、教職員の皆様、そして卒業生の皆様、兵庫県立大学の発展とプレゼンスの向上に、さらに一層努力しなければならぬと考えます。

さて、淡水会について現状は、第1点、各支部等への参加者の高齢化です。第2点、体育会クラブの運営・維持が難しくなっています。第1点については、現役生と卒業したばかりの社会人をいかにフォローして会への参加を高めていくのかいい工夫はないのでしょうか。大学祭に社会人（会社単位）の出席をしては

どうでしょうか。第2点のクラブの運営・維持ですが、環境人間学部を商科キャンパスに移すことで商科キャンパスの人数を増やすこと。その上、県庁跡を公園にするのなら神戸キャンパスを立ち上げて一般教養については全学部神戸キャンパスで行う。そして、大学のコミュニティーの輪を広げていくという極端な案を考えてはいかがでしょうか。

今後、現役学生とOG・OBとの活動をもっと考えてさらなる飛躍をめざしていきましょう。



1983年卒業アルバムより





兵庫県公立大学法人理事長 國井 総一郎

令和5年4月、五百旗頭前理事長の後を継いで、兵庫県公立大学法人の理事長に就任しました國井総一郎です。淡水会の皆様には、日頃から県立大学の運営に多大なるご支援ご協力を賜り、心よりお礼申し上げます。

私事ですが、昭和51年に、兵庫県立大学の前身大学の1つである姫路工業大学産業機械科を卒業し、地元兵庫県に本社を置く株式会社ノーリツに就職しました。大学で学んだ知識を活かして、家庭用ガス給湯器の開発設計に従事、その他にも商品企画や営業支店長など様々な職種を経験した後、20年以上会社の経営に携ってきました。

この度、当法人の理事長就任にあたっては、『初めての民間経営者』かつ『初めての本学卒業生』として職を拝命しました。愛着ある母校の発展に尽くす機会に恵まれ、大変嬉しく思うとともに、私自身がこれまで民間企業の経営者として培ってきた経験やノウハウを最大限活用しながら、学生や教職員の皆さんと力を合わせて、さらなる成長を目指してまいります。

思い起こせば、私が姫路工業大学に入学した当時は、6学科制で1学年は300名、全学でも1500名弱の単科大学でした。平成16年、独自の歴史と伝統を持つ神戸商科大学、姫路工業大学、県立看護大学が統合して兵庫県立大学が開学しました。これにより今では、神戸、姫路、明石、播磨さらには淡路、豊岡まで、9つのキャンパスが県内全域に位置し、多様性と全県的な拡がり誇る国内トップクラスの公立総合大学となりました。私は就任後すぐに各キャンパスや研究所、附属学校など、すべての教育研究施設を訪問しました。いずれにおいても、独自性を発揮した特色ある教育研究が行われていることに大変感銘を受けました。

一方で、日本の大学を取り巻く社会の状況は、非常に厳しいことを痛感しています。国際競争の中で日本の大学の地位は下がり続けています。また、国内では

少子高齢化が進み、今後ますます学生が確保しづらい状況が加速してまいります。このような環境の中、私の役割は大学運営に『経営の視点』を取り入れることだと認識しています。私がノーリツのトップとして常に言い続けてきたことは『寝ても覚めても徹底的に考える』『ライバルの真似はしない。誰もやらないことに挑戦する』です。大学も同じことで、巨大な国立大学の真似をしても勝てません。『独創的な研究』や『独創的な発想ができる学生』を社会に送り出すことで、会員の皆様が卒業生として誇れる大学となるよう目指していきたいと考えています。

最後に、就任以来、私が最も力を注いでいるグローバル化の取組を紹介させていただきます。現在、日本における就職環境は人手不足による圧倒的売り手市場です。それは海外でも同じです。兵庫県にはたくさんものづくり企業があり、そのほとんどが海外展開し、現地法人を持っています。ところが、海外も人手不足のため、良い人材が確保できないという問題が生じています。そこで、大学と企業が海外でも採用や共同研究の連携を深めることはできないかと思い、現在、ベトナムの日越大学と協議を進めています。11月には日越大学学長とオンライン会談を行い、12月には実際に私がベトナムへ行き、日越大学や現地企業と意見交換を行いました。今後は、県立大学が提携する海外大学から、現地法人が学生を採用する流れを作りたいと考えています。また、共同研究にも広がることを期待しています。

これからも、教職員、学生、OB・OG、県・企業・団体など、多様なステークホルダーの期待と信頼に応えるべく、経営の舵取りをしていきたいと考えています。引き続き皆様の温かいご支援ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



国際交流センター (Center for Global Engagement)



# 兵庫県立大学創立20周年



兵庫県立大学 副学長 草 薙 真 一

1996年4月1日のことでした。私は縁あって、商経学部経営学科助手として、東京の私立大学大学院のドクターコースを単位取得退学する形で、神戸商科大学に赴任してきました。その日から、私の大学教員としての日々が始まりました。ずっと同じキャンパスを見続けて、はや28年近くが経過します。私の研究室は神戸商科大学キャンパス研究棟1-306で、赴任当初から同じ部屋です。

神戸商科大学はいわゆる三大学統合で、2004年4月1日に兵庫県立大学となりました。現在、兵庫県立大学は9つのキャンパスを持っています。いずれのキャンパスも、兵庫県立大学に欠かすことはできないものです。学生・院生と教職員がコミュニケーションを大切に、協力する姿がどのキャンパスにもあることが分かります。せつかくのそのような環境が、強固な学内コミュニティを形成し、学問の深化と共に人間関係の構築に寄与するようになることを望まずにはいられません。それには理由があります。兵庫県立大学は2024年4月1日に創立20年という大きな区切りを迎えるのです。

大学はいま、厳しい冬の時代を迎えています。人口減少・少子高齢化の波が、兵庫県を襲っています。そのような中で、兵庫県立大学は、国際的な視点を強調し、地域振興に貢献し、あるいは地域の災害からの復旧に関与したいと考えています。それらを扱う様々な副専攻のプログラムを作り、このプログラムの参加者には学部をまたいで学び、多面的な視野を養っていただきます。これが本学の学生たちにとって、やがて様々な舞台で活躍するための大きな強みとなるはず。そして神戸商科大学キャンパスでは、副専攻以外にも、もっと学べる方法を学び、欲しかった知識を得る素晴らしい経験をしていただけるよう、実践的な教育を積極的に取り入れています。インターンシップなど、産業界との連携プログラムや企

業訪問、実地調査などが日常的に行われています。これは学生たちが卒業後に即戦力となる力を養う上で非常に有益なものです。大学院の拡充も重要です。院生になると切磋琢磨の連続が待っており、学会などで発表し、新しい知見を得ることが、自分のアカデミックなキャリアを切り開くために必要不可欠でもあります。教員も学問の進歩への貢献が強く要請されています。そこで、神戸商科大学の全ての教員が、学部ではなく大学院の所属になることが計画されています。兵庫県立大学神戸商科大学キャンパスの発展には、淡水会の応援が欠かせません。今後も変わらぬご指導とご支援を、どうぞよろしくお願いいたします。

SDGs, コロナ禍, AI・DX, キャリア...  
時代は私たちにたくさん課題を投げかけ  
世の中は無自覚に期待する。  
でも、私の心を“今”本当に動かすのは  
誰かに用意された設問だけではない。  
私が本当にしたいこと。  
私だけの使命は、  
きっとその先にある。

兵庫県立大学  
HYOGO PREFECTURAL UNIVERSITY

国際商経学部 | 社会情報学部 | 工学部 | 理学部 | 環境人間学部 | 看護学部

WEBサイトにて特設ページを公開中